The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 230. SEPTEMBER, 13TH. 1890.

EDITORIAL :—Life, a Journey Boarding-house for Students.

MISCELLANEOUS :—What is Success in Life? Aimless Heroes. Night Scenes in Hoshigaoka. A Tragedy. An Interview with Madam Brahvaski. Motto on a Bag. Miss Isawa Kei. Even such ought to be Our Life. Dog-slaughter. An Interview with Mrs. Hirawo. Tear-drops. A Summer Journal. Humorous.

NOVEL :—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百三十號目次

社説　人世は猶ほ行旅の如し○下宿屋(府下の男書生)

雑録　何をか立身さ云ふ○英雄大志なし○星が岡の夜景慘劇○ブラヴアツキー女子を訪ふ○袋の賛○伊澤けい子○實に人はかくありたきものなり○犬殺し○靜女埜末平尾光女史を訪ふ(生野ふみ)○涙滴々○消夏錄○きよめぬ庭

小説　小公子

寄書　「青年に警告す」の社説を讀む○七月七日○夏の夕の川風○交詢

批評　正義の友響○初等教育學○啓蒙例訓○普通國文自在

時事　御殿様、御前様○島田三郎○軍人社會○敵國外寇○美術學校中に詩歌の一科を加ふ○天地神學論○万國平和協會々議○宗政大學校○アウストリア婦人大社白○明治產婆看病婦學校○本所講座○越前羽二重○東京慈惠醫院○京都美術學校○三田尻女子青年會○高知婦人會○河內婦人教會○和歌山婦人會○神戶英語學校○山梨英和學校○和蘭の骸奶○骸奶記事(以上)

WOMEN IN JAPAN.

I. A private school in Niigata has during the summer made arrangements for giving the pupils instruction in silk-culture and other branches of womanly work. They have thus taken advantage of the cool summer of the north to provide means for thrifty girls to earn a little money to carry on their studies.

II. Two officers of Kōfu, Yamanashi Pref. who are reported to be earnest Buddhists will under the auspices of the Governor and his daughter, start a Magazine called The "Yamanashi Jogaku Zasshi" intended for the advocacy of Buddhistic method of educating girls in opposition to the Christian method. The work will be started as soon as the contribution amounts to two hundred yen.

III. An association of young men in the same Pref. have during the past month sent earnest invitation to Mr. Iwamoto of this office to come over and aid them in their efforts against public immorality. Consequently he went over on the 28, and held three large meetings respectively at Katsunuma, Kōfu and Ichikawa. Many influential men of the palce expressed themselves in favor of the movement and one physician who had been hitherto opposed to the movement, turned into one of the earnest advocates. Through the kindness of the editors, Mr. Iwamoto's lectures appeared in both the local news-papers. We are in hopes that the only licensed place of public immorality in the Pref. which consists of only twenty-three houses, will soon be done away with.

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百三十號 明治二十三年九月十三日發兌

社說

人世猶は行旅の如し

人、菜肉を食ひて己が筋骨となす、菜肉忽ち化して筋骨となるにあらざる也、人よく其の胃腑を用ゐて之を消化するに因る。斯の如く、人は亦た包圍の万事を消化して、其身裏に懷藏し、天地を軀殼の內に同化して聞見臭味する所ろ暫らくにして慣熟し、習慣直ちに凝つて第二の常性となる也。喩へば溫湯に浴するもの暫時にして其湯の溫なるを忘れ、冷水に沒するもの瞬間にして其水の冷なるを忘るゝが如し。水と湯と乍ちにして其冷溫を失なふにはあらず、感ずる所ろのもの直ちに慣れて其感を鈍ぶくするを以ての故也。

動かざる之を居と云ひ、變動する之を旅と云ふ。旅は是れ人を動かして、其包圍に慣熟せしめざるもの也。朝たに家を立ち出で、日暮れ鐘かなしき比ろ宿りを求む、終日歩みを重ねて歩々進行し、四邊の光景一刻も留まる所ろなし。われ動くに非ずんば、山岳の動くなり、われ行くに非ずんば河水の流るゝなり。廻り燈籠の回轉して止みなきが如く、流星の飛んで留まらざるに似たり。われと萬物と暫らくも相休することなし、是れ旅なり。

此を以て、旅は流水の如く、歩々觸るゝ所ろを新鮮にす。常には思はざることも旅に於ては切に思ひ、常には事もなく感じつることを茲には得あらぬやうに感じ、常には無心平氣に解したることをも此時は最と情けある事に會得す。眠りたる人情の生き返りたるが如く、澱みたる道念の澄み渡りたるが如く、感覺鋭敏にして物に動き易し、而して四方の風光其面てを洗ひたらんとの如く、宛がら一新したるの面貌を以てわれに臨むの心地す。此に於てか、何如に情けなきの人も、旅には深切多感の人とならざること、殆んど稀れなり。

朝早く起き出で、東天やうやく白らむの比ほひ、淸らかに口すゝぎ、輕ろやかによそほひ、宿を出で立つの時には、鳥の鳴くも勇ましく、雀の囀づるも樂しく、心氣淸々、天地歌ふてわれを送るの感あり。此時に於ては、馬子の道ゆくを見てもうれしく、農夫の歩むを見てもうれしく、犬の吠るを見てもうれしく、鷄の羽ばたきするを見ても嬉れし、亦何んの歎きあらんや。

行くと數丁、朝ぎり既に霽れ、早天の空氣早く濁どり、四方僅かに濃厚となる、時に顧みてわが宿を望めば、白壁日光に照り、門松聲なくして立つ、朝たの爽氣すでに去つて早くも名殘惜しき念を生じ、數歩あとに立ち反りて暫らく躊躇彷徨す。然れども、復た家に歸るべきにあらねば、心を翻つて前途に向ふ。

此時よりして心細き感を生じ、隨つて伴を求むるの念ひを起す、もしわれと方向を同じふして歩むの人あれば、直ちに話しかけて其行先を問ひ、得べき限りは同伴して道づれとあらんとを欲す。此時に於ては其人を信ずると赤子の如く、己が身分を忘るゝと仙人の如く、情をかくさゞると露はすが如く、情けあると骨肉に對するに均し。若し、此人等をして、紅葉館の秋の夕べ、鹿鳴館の夏の宵、宴樂蹈舞して互ひに美を競ふの席に於て相面せしめば、其の相ひ飾ると遊び女の如く、其の相疑ふと敵同士の如く、只だ互ひに陷さんとを欲し、毫も情けを以て相助くるの念ひあるとなけん。但だその旅天ともに頼りなき地に於いて相見るが故に、則はち彼等互ひに眞實とあり、深切となる耳。

夜ふけて月を見れば、何處に於ても悲し、人靜まりて雁の鳴くを聞けば何處に於ても哀れなり、左れど旅に於てせば其の感一ときわ深し。日暮れて宿りに着すれば、燈火くらく、人親しみあく、寂然孤坐して、來し方行く末を思ふ、吹く風さびしく、流るゝ水の音耳をすます、時に空天に飛ぶ雁の鳴き渡るを聞けば、

さよ深き雲井に雁の音すなり、
我獨りやは旅のそらなる　源雅光

無情の孤雁亦たわが友の如し。窓を開きて、仰ぎ望めば、月、初めて見る所ろの山の巓だきに、例の如く澄み渡れり。未だ物言はずと云へども彼は舊知己なり、異鄉之に接して友を見る心地し、暫し之に打向へば感想すでに昨日に異なる。彼は無言の光を照らして嘗て無き無限の感覺を惹き起し、われに雜々の情けを與ふ。月よ、汝ぢは盈蝕變化して一夜も定まるとなし、而して千古つねに同じき面てを現ずるは果して汝ぢなりや。汝ぢ嘗て吳王の宮に映じ、亦た昭君の淚を照らし、亦た曹孟德の宴に出で、亦赤壁の水に映りたるか。汝ぢ嘗て奈良の宮の簾にかゝり、亦平氏の壇の浦に宿り、亦た不識庵の夜に伴侶し、亦た關ケ原の屍の上に照りつる乎。而して今ま亦た同一の光を以て、彼の逸居して民の膏血を吸ふ肉食者が放蕩

姦樂の窓の内にさし込み、亦其光を以て、國を憂ひ民を思ふて空しく牢獄の内に囚はれ陰々裏慨歎長恨して嘘唏する人の監獄の穴に照らし入り、亦其同一の光を以て、麻を紡み草鞋を作り朝々暮々肉を削りて僅かに肉を補なひ租税を上納するが爲めに辛くも生存する可憫可愍なる農家茅屋の檐の端に掛るとある乎。われ昨夜汝ぢを見、今夜亦た汝ぢを見る、而して前途亦極りなくわれと共に存する乎、汝ぢが缺くる時われ肥ゆることあり、然れどもわれの死する時汝ぢ尚ほ億々年の后に生存する乎。万感坐ろに湧き起りて高潮又高潮、

　都にて月を哀れと思ひしは、
　　數にもあらぬすまひなりけり　西行。

枕頭物の本を繰り反し、眠りを召び起してわれ則はち眠る。夢にたゞ故人と家族とを見るのみ。朝たに夙く起き出でゝは、又旅びす。到る處ろの山川皆な未見の友にして、ゆくさき〳〵われを迎ふるものありとしも思ほへず、たとへば、家を去つて空谷の下に落入るが如く、亦地を棄てゝ雲漠々の上に登るが如し、宿る所ろ宿りにあらず、進すむ所ろ進すみゆくにあらず。

　枕とていづれの草に契るらん、
　　ゆくを限りの野邊の夕ぐれ　長明。

三

　あけば又こゆべき山の峯なれや、
　　そらゆく月の末の白くも　家隆。

旅の人よ、乞ふ暫らく、汝ぢが行かんとする前途の目的を放擲し、未だ到着せんとする所ろを定めず、たゞ日々夜々漂々泛々として旅びすると假定せよ、汝ぢが心細きこと更に幾干ぞや。但夫れ、汝ぢは其目的あるを以ての故に、僅かに望を失はざることを得るなり、然れども其の未だ望みに達せざるに當つては、悽愴寂寥尋常にあらず、此に於てか、極めて人に親しみ易く、亦た至つて深切なり、其宿りを見ると假りの居處にして方丈のすまひの如く、其の四邊の物を見るや流轉の中心にして流れに立つの心地す、住宅衣食に心を置かずして只管ら前途に喘ぎ、途々の風景に引とめられずして之れを后ろに振りすて、只だ同伴の人に親しみて日夜途を急ぐ、必竟速かに其の到着すべき所ろに達らんが爲め也。

去れば、旅行は人を化へて眞との人たらしむ。旅に於ては彼は至つて情け深く心切なるの人とある、能く同伴者を信じ亦た之を助く、彼は其の經歷する所ろに一々濃感して終始つねに鮮新快活の志想を起す。彼は其日々の衣食住宅を假りの物

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と觀じて有形皮肉の事物に執着するとなし。一言するに、此等旅行の効德は、人のつねに動くより生ず。人つねに變動して其周邊の事物に慣熟せず、つねに新らしき感覺を以て万事を解釋し、其の經過を追想し、其前途を想像し、過去未來を明らかに思念して、則はち現在の地位を確認す、此に於てか人初めて其の人情の上に立つ也。旅行の効德は四邊の事物に慣れざる所ろにあり、万景の新らしき所ろにあり、感想の斷へず變化する所ろにあり。

世人一轉して沈思せよ、人世亦猶ほ行旅の如きものにあらずや。行く川の流れは絶えずしてしかも本の水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは且つ消え且結びて久しく留まるとなし、世の中にある人と住家と万づのもの皆なかくの如し。玉敷の都の中に棟を並べ甍を爭へる尊き卑しき人の住居は、代々を經て盡せぬものなれど、之をまことかと尋ぬれば昔しありし家は稀なり、或は去年破れて今年造くり、あるは大家滅びて小家となる。住む人も之に同じ。處ろもかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅に一人二人なり、朝たに死し、夕べに生るゝならひ、唯だ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何かたへか去る。而して、人の爲す所ろ亦た如此し、今年の花すでに去年の花に異なる、今年のわれ豈に去年のわれならんや、日々昨日の事業を蒙むりて亦新たに種まく、爲す所ろの事一つとして新らしからざるは無し。此の間だに立つてわれ沈思すれば、われ日夜旅行せずと云ふとなし。世果して無常なるか、われ抑そも進步するか、暫らく之を言わず。然れども世とわれと必らずや同存同觸するを能はず、われの接する所ろのもの常に變化す、われは日夜刻々斷へず旅行するもの也。思ひの通ふ所ろ亦た日々に新たなり。智識の進步するは智識の旅行に非ずや、道德の發達するは道德の旅行に非ずや、智德の死して動かざるものは止む、苟くも其動くものは常に旅行せずと云ふとなし、昨日見るとを得ざりし所ろの智は今日之は眺むるとを得たり、今日悟るとを得ざる所ろの天、明日雲ひらけて之に感ずるとを得ん。エメルソン曰く、わが躰た家に留まる時、わが心は旅びす、われの說、われの好み、われの力量は豈に、過去遠方のものに接するが故に起るにあらずやと。あゝ智德亦た旅行するもの也。

人世實に行旅の如し。人皆な長ぜざるはなし、其長ずるは新らしき時代に進む也。万國皆な變動せざるはなし、其變動す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るは新らしき文度に進む也。眞理の日々に現はるゝは、吾等眞理界に於て歩を進むる也。后りへにいよ〳〵歴史を積むは、吾等が進路の重なる也。人と世と何れか旅行せざるとあるべき。人世實に行旅の如し。

万人皆旅中にありと知らば、當に其の客舍に在る時の如く、情け深かるべし、感切あるべし、世の事に執着するとなかるべし、而うして其の前途の果して何處に存するかを思ふて、人の運命を考ふるに寸刻も空怠するとあらざるべし。但だ夫れ、彼等小さき旅天にありては旅たるとを知り、大なる旅行にありては其旅たるとを知らず。彼等車の動くとを知る、然れども車を載せたる地球の亦た動くとを知らず。此故に彼等は、行旅の中にありて尚ほ利慾貪邪に耽り、假りの宿りに一生を過ぐして其の到るべき所ろを思はず、生命空しく旅の天に消へて路頭の草の露とある。

あゝ同胞よ、靜に沈思せよ、君等皆な旅中の人にあらずや、何んぞ更に相信じて、情けを交はし、一層の委賴を結びて共に同行同伴の道づれとあらざる。君等が四邊の富貴名譽は一夜のかざりに過ぎず、君等が大厦高樓は一夜の假りの宿りに過ぎず、何んぞ脱却出離して彼の到岸を望まざる。君等が一生は、太空の空、大廣の廣を通過して、日々に新らしき光景を踰ですゝむ、也何んぞ鮮新多感の念を以て之を思ひ、更に一層高深の情けを以て自己の運命を沈思せざる、覺法法親王の歌に、

定めなき浮世の中と知りぬれば、
　いづくも旅の心こそすれ。

旅に於て道連に深切ある人、安くんぞ世に於て情けなかるべき。吾人は世の同胞が行旅中の人たるとを明認確悟せんとを希望す。苟くも然らば、人情人世の態當に一變すべし。

下宿屋

（上）　府下の男書生

今日の老人は生ひ先きも分り、最早や長年月の人物にあらずと知らる。現に時めける人達もいはば朝顏の露に異ならず、或は露おちて花殘る、殘ると云へども朝日に枯れん、或は花萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕べを待つとなけん、榮え久しからんとも思はへず。たゞ久しく賴むべきは

到底青年なり、青年は國の相續者にして亦其元氣なり。此元氣もし腐るときは一國の榮光長しなへに望みがたし、相續者の賢にして且つ正しからんとは、何よりも先づ願はしきことにぞある。

而して學生は青年のうちの青年なり。たとへば元氣中の精髓、相續者中の長子の如し。學生にして若し腐るときは、青年すべて腐る、青年にしてすべて腐るときは、一國もはや望みを措くべき所ろあらず。

而して東京の學生は日本の學生中の學生なり。吾人其狀態を見て、全國の學生の風儀を推諒し、延ひて一般青年の景況を測量し、慨歎にたへざるもの頗ぶる多し。之を敎ゆるの學校もとより宜しからず、之を導びくの敎師亦た有德ならず、四方の光景みな相合して之を遊惰邪惡に誘なふ、今の東京の學生は實に魔界に沒するものに似たり。吾人にして在地方の父兄たらしめよ、而して其の愛子愛弟を東京に送りて留學せしめんとすと假定せよ、吾人は到底安んじて之を東京に送り出すと能はざる也、三四嚴密なる校舍の塾中に之を送るのと、若しくは府下に信任すべき良家族ありて之に委托するのとあらんには、亦申分ある可らず、左れど滔々たる普通の父兄が其子弟を府下に留學せしむるとの如く、たゞ東京にさへ行かしめば自然に學者となり自然に立身出世すと思ひて之を送り出すの類ひに於ては、たとへば愛兒を溝壑に投ずるが如く、生のこるものは蓋し千百の一二のみ、片輪となりて生のこるものは多かるべし、然れども立派なる有德高潔の人物となりて生のこるものは、恐らく指を屈めて之を數ふるにも足るまじ。

必竟是れ塾舍の取締りの宜しきを得ざるに據る、されどたとひ塾舍悉とく宜しきを得たりとするも、尚ほ將た安んじがたきものある也。そは塾舍の數は至つて少なくして、男書生の數莫大なれば、到底府下男書生の四半をすら入塾せしむると能ふまじきがゆえ也。帝國大學すら其書生を悉とく塾内に容るゝと能はず、構外に夥多の認可下宿屋を置き、之に殆んど名のみの管督を施こして僅かに其欠を補ふに過ぎず。第一高等中學すら、今年に至りて初めて多少の塾舍を設け、假りに其書生の極少數を入塾せしめんとを計畫するほどなり。堂々たる二個の大學校にしてすでに如此し、其他區々たる幾多の官立學校、及び資金足ず万事思やうに成ぬ所ろの私立學校に至つては、其塾舍管督の不完全なると固より言ふ迄もなし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

左れば、たとひ塾舍の取締宜しきを得るとも、尙ほ書生の四半すら入るゝに足らず、其余は皆な外より通學するものと知るべし。

扨て通學するものゝ中ち、多少は親戚身寄り又は友人の家などに寄宿するものもありと云へど、多くは所云る下宿屋に下宿するを常とす。則はち府下十万の書生中、大凡そ其七八万以上は確かに下宿屋に寄宿するものと知らるゝ也。

下宿屋は則はち彼等が爲めのホームあり。若し人を形造くる勢力の過半は其ホームにありとせば、彼等七八万の書生の品格行狀を形造くる所ろの大勢力は、即はち今日の下宿屋に在り、彼等は學校に通學し、敎場に於て學理の講釋を聽くともあるべし、生理の解剖を爲すともあるへし、又法理政論の討議を爲すともあるべし、然れども今日の敎育にては此の處ろに於て德育の談話を聞くと多しとも思はれず、啻に多からぬのみならず殆んど絕無なりと思はる。則はち彼等は學校に於て其智識を開發し、理窟を研究すれども、未だ嘗て人情道德を開發するの感化に接すると能はざる也。而して彼等が爲めに此の大功業を成就すべき其のホームは、即はち今の下宿屋なり。彼等は此所ろに於て、身體を愛護せんとを要す、人情を知らんとを要す、亦人情に温たまらんとを要す、亦た犧牲献身の念を發達し、純潔淸和の風格を養成せんとを要す。言を換ゆるときは、人間の智の事を除き、其身體及道德の事に付きては、總じて此の下宿屋に於て其敎へを受けずんばある可らざる也。軟和餅の如く、何如にとも印せられんと欲するの青年學生は、今ま多く下宿屋に在り、今の下宿屋なるもの、果して能く彼の大功業を成就するの價値ある乎。

雜録

何をか立身と云ふ

もみぢ

何をか立身と云ふ。人臣の位を極め、權威富貴を得る是れ立身か、如此き立身は砂を盛るに似たり、一朝にして崩るゝとある也、安んぞ身を立てたりと云はん。眞の立身とは、立派なる人間となるにあり。立派なる人間とは衣服相貌の美くしきにあらず、言語應對の艶なるにあらず、心淸く精神高潔にして道念を完美したるものを言ふ也。人此に達すれば則はち立身すと云ふとを得。火も之を燒くと能はず、盜人も之を奪ふと能はず、俗人も之を汚すと能はず。之を磐の上に建てたる家にたとふ、大水出で暴風起るとも倒るゝとなし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かゝる立身は、人日夜に刻苦して善に勵むにあらずんば、成就するとなし。孔門の人は云く、日に三たび省みると、釋氏の人は云く、禪坐して煩惱を去ると、クリストの徒弟は云く、一切を棄てて神の國に入らんと。此等道德上の黽勉は、山を動かすよりも難く、水を乾かすよりも勞多し、そは邪念の心に存するは山よりも強く、邪慾の胸に溢るゝは水よりも深ければなり。

かゝる刻苦勵精の后ち成就せるを眞の立身とは云ふ。立身とは即はち多年の勉勵に成るものなり、立身とは一生勞苦の卒業證なり。左れど、世上に謂ふ所ろの立身は、必らずしも黽勉の人に來らずして偶然怠惰の人に來り、初來志しなきものゝ上に落ちて、有爲多恨の人に到らざるとあり、世上立身の成効は偶然に成就すると多きものなり。安んぞ之を見て賞賛すべけん。よし賞賛すとも、安くんぞ之を其人の功に歸すべけん。世上の立身は忽焉として來り、漠然として成る。因果の神之を掌どらずして、偶然の鬼徒らに弄わそぶ。

〇英雄大志なし　みどり

昔し清の倉山居士、古今の歷史を通覽し、英雄成敗の跡を鑑がみて、炯々其眞相を穿ちて云へらく、古英雄未レ遇レ時都無二大志一と。

われ夙に此の念あり、前年「志なくして達す」の一篇を草す、載せて演說著作材料新誌にあり、今ま「もみぢ」君の說あるに會して再たび之を言はんと欲す。毛利元就云はく、天下に君たらんと欲して初めて一國に主たりと、されど世間實際の事大率ね然らず、漢の高祖は始皇の行列を羨やみて后には思はず天子となり、后漢の文帝は執金吾を望みて亦思はず天子となれり。福澤翰吉氏が大閤秀吉の事を評するを聞けるに、人は決して初めより大志あるに非ず思はず登りて思はず志を大にし遂に非常の事を爲す也秀吉が丹羽と柴田を相慕ひて羽柴と稱へたる比には未だ太閤となるべき巨望あらざりし也と云ひき。われ之を聞きて思へらく、秀吉を如此く評するは賴山陽も亦然あり、是れ或は然らん、されど其當否は暫らく置く、福澤氏が斯く評すによりて、推すれど、同氏今日の地位も亦決して初よりの志にあらじと。余れが此の說を聞きて怫然としたる族らもありしが、后ち時事新報明治十九年の頃の社說に、

余が年二十にして始めて洋學に志したるは今を距る三十餘年前あり此時に洋書を讀み始めたるは何の目的を以てした

るか今に於て自から解する能はず……畢竟余が洋學は一時の偶然に出で丶其修業の辛苦なりしが故に之に入りたるものなりと自信するのみ、されば余が弱冠の時より今日に至る迄の生活は悉皆偶然に出でたる僥倖なり。

此れ蓋し實談にして能く世故を知れるの卓言なり。蘭學事始に、杉田玄白先生の記事あり、

今時世間に蘭學と云ふ事專ぱら行はれ志を立つる人は篤く學び無識なるものは漫りに之を誇張す、其初めを顧りみ思ふに昔し翁が輩二三人不圖此業に志を與せしとなるが、早や五十年に近し、今頃かく迄に至るべしとは露思はざりしに不思儀にも盛んになりしと也。

世間の事業大率ね然り、塞翁が一喜一憂豈に翁自らの成敗ならんや。左れば巨万の富を積めるとも誇ると勿れ、是れ汝ぢ自からの力にはあらず、亦一錢の蓄はへなしとも卑しとするとなかれ、是れ必らずしも其人の過ちにあらざれば也。田口卯吉君つねに云く、金をもうけるには、もうけんとしてもうかるものに非ず、たゞ運を待つのみ、古來富める人の傳記を考ふるに大抵然なりと。さらば富と貧しきとは、運なり、人にあらず、人安くんぞ人に非ざるの事を誇るべけん。

如此き立身は賴むに足らず、貴むるに足らず、揚言するに足らず。立身は實に自からの刻苦に成れる道德上の大成功なるべし。

○星が岡の夜景慘憺

あきしの

語ふべき友もなく終日苦熱に困じ果てたれば涼爽の氣を恣にせんと欲し手慣し笛を吹きすさみつゝ明月に乘じ星が岡の小丘に到る萬籟聲なうして喧塵至らず老松古杉翳然一小仙境をなす、則ち石級によりて獨り快を取る數時思は忽ち走せて回顧數年の昔しにあり失せにし友逝きし兄弟の事など浮び出で丶心漸く悲し。

學びの窓に日を積みて久しく古鄕にある父母の溫顏に接せず異境に旅寢の夜を重ねてながら故園の妻子に遇はざるの人は夕月の影幽なるに掉鹿の聲虫の音など憐れに聞ゆれば武き心もいつかは深き思に沈むべく砧の響鴈の鳴音などみな涙の種ならざるはなし、去ものは日々に疎しとは誰が云ひ始けん人の心はさ迄に冷かなるものには非ずかし、假りの交り浮たる友の語ひはいざ知らず親子兄弟夫妻の具情にいかで左ることのある可ぞ、我身久しき前に母を失ひ今まはや五年のむかしとはなりぬ、世にてまた遇ふべきよすがも非るになどてかく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

迄に深く思ひ續くるにや、忘れん者と思へども忘られず堪へぬ思に敷妙の枕に涙の露のしめやかなる夜半も多かりき、世の人の妻子を思ふ心もまたかくはありぬべし、先の日の樂しかりしは父母在せしが故なり過し夕の宴は妻子あるが故なり、されど生者必滅會者定離の言葉にもれず相見るよすがのあらずなりては切なる心の慰めかねて今は苦しさのいやまさるあるべし、子を思ふ親の心夫を慕ふ妻の思親をば戀ふる子の情、深きにつれていよ〳〵苦し、されど世には麗しの交りを隔るもの多く、無常の風は、憐れ襁褓のうちの幼兒が含める乳房を奪ひ、また頭に霜を戴ける老の身のたよりと思ふ杖をも取り去り、訣別の苦しみは、江南の暮天を仰ぐ乙女の袖を絞らしめ、帝京を顧る志士に胸を裂の思あらしむ、月は憂て花は泣けり、噫世はなどてかく寡婦孤兒の多きや、別愛離苦の夥しきや、團欒せるホームはこの苦しみを生ずるの元因か、堅く愛し深く思ふの友はこの苦しみを結果するの媒か心緒漸く亂れて厭世の思切なり、於是星が岡小丘滿目の光景悉く慘憺あり、時適かに歌ふものあり、聞けば

人は亡び世は　うつりかわるも　我等は恐れじ　神はわいなり　我れ等も貴き御神を愛せん。

印度の幻術者

ブラヴアツキー女史を訪ふ（中）　フランセス、ウイラード

を聞くに實に希有珍奇の感あり、如何なる特性を天に得たりけん、學術に通じ、未だ他人の多く享有せざる運命に中す、

扨て、女史が經歷

東洋哲學の神髓を悟り、自ら敎師となりて一の新世界を成す、身は露國の貴門に生れ、追放遠流の罰を蒙りぬ、爾來幾多の患苦不幸を嘗め、遂に無宿不住の印度人と遇ひ、印度に數年の星霜を勉學に費し、地球全洲を巡廻する三度、今は＝ウヨークに來り、佛人の劇場に於て變幻奇妙の術を行ひ、聲譽榮稱す。

ブ女史笑を含んで坐す、暖爐の火温かに、烟草靜かに薰りぬ、此時數多の問を發す、最後に女史答へぬ

知神の事

につき女史曰く今妾の信ずる所如何と問はる、妾は知神者なり、若し御身之を知らんとせば此書簡を讀め、是未だ我社會に加はらざる人に知神の何たるを解得せしめん爲め認めしものあり、妾嘗て「神の顯現」と題する一書を著はしぬ、之を著はす時妾は一日に十七時間勉め、戸外に出る事僅に一日數度の

み、斯くして二年打つゞきしかど少しも疲勞を覺えざりき、是畢竟一種特有の秘術を知るが故なり、食物とても格別撰む所なく、二個の雞卵、一盃の珈琲以て朝の食に宛て、晝間食するなく、夜に入つて少量を食するのみなりき、妾の著書印度に於て既に五百部を賣り捌きぬ、知神協會々長は今印度にあり、これ其眞像なり(此時寫眞を示す)、此帳簿は即ち會員の記名する所とす、會長今將に米國に來らんとす、既に會員たるもの此處に三万人、印度には二百万人の多きに達す、ガラスワチイなる人ありてよく人を教化して會員に導く、彼は希世の偉人にして人自ら之を崇敬す、アリア、ソヌジュに於ても二百万の會員あり、是偏に基督教傳道會社の事業に反對を試みるものなり、御身今チエンゲーセン氏の事を問ふ、

彼は人を以て神となし、妾等は唯現世のみと信ず、妾は人類の永遠不滅なるを信ぜず、妾は心意上の不可思議術を行ふ、されど靈魂なるもの存せず、エヂソン氏の云へるが如く、妾此に於て話すれば直ちに印度に傳はる、而して一條の電線を用ゆるなし、是奇妙には相違なし、されど古來印度に於て爲す所、今更珍しからず、妾斯くなし、斯く信ず、何を以てか基督教を信ずる事をせんや、此故に知神協會内には基督教徒なし、絶えてあるなし、されど相互に信じ、相助く、思ふに妾等の信ぜざるを見て御身等心に快からざるべし妾之を御身等の爲めに悲む、されど妾如何ともする能はずと。

袋の贊

不稀雄

以前南畝翁の狂哥集を讀み――からはから、にほんはにほん、からの紙屑のみを拾ひて、にほんの刀をわするゝ事なかれ(道中に立つの市人きりすてゝまたはくゝらロ日本魂)――ひたすら感吟せり。そも韓信は何者ぞ、二本の味をしらぬしれものにや。おもんみれば、けだし皇國の人は孔子や佛氏の唾にあくものならじ。鶉衣は俳文の粹なり。能く幽玄を聞き微妙を穿てり其袋の贊の如きは「水は方圓……」の金言を祖述し益神に入りぬ嗚呼水より出でゝ更に冷かなる氷とは皇國の人の心ならんかし。

器は入るゝ物をして己が方圓に從へむとし袋は入るゝ物に隨て己が方圓を必とせず實なる時は肩に餘り虛なる時はたゝみて懷に隱る虛實の自在をしる布の一袋壺中の天地を笑ふべし

月花の袋や形は定まらず

伊澤けい子

前々號に記し置たる同女史が略傳なりとて、波多野傳三郎氏より左の一文を寄せらる、編者も坐ろに涙こぼれ、言ふよしなし。

栴檀は嫩より芳し鸞鳳は雛より翔るとかや茲に栃木縣下野國河内郡宇都宮町の富豪伊澤郡臧氏の次女ケイ子は天資沈勇貞苦父母に事へて孝、姉弟に交はるに悌にして且つ頗る學才ありたり同子明治七年十二月を以て同縣同國同郡石橋宿に生れ同じく十二年十二月始めて學に宇都宮西校に就くや試驗毎に最高點を得て常に級中の首位を占め加之進級試驗に應ずると二回に及びたり同じく十九年下野英學校の新築功竣はるやケイ子小學の餘暇を以て贄を同校に執りしに又第一部に溜したり高等小學三年の課を卒はらんとして栃木縣尋常中學校に轉ずるや又入學試驗に最高點を得て其の首位を占めたりケイ子同校に在りし時教員某の措置不公平なりとて同級生一同不平を鳴らし一通の獻白書を呈せんとするや同子撰ばれて其の委員に當れり子時亦年十二歳なり同じく二十一年二月尋常中學三年課修業中東京築地海岸女學校に轉じ四年生に編入せらる同校在學中も亦常に高點を得て首位を占む五年修業中偶々同校の組織に改革あり高等課生は皆青山英和女學校に移さるケイ子も亦其の一人にして同校に轉ず同校在學中も亦級中の首位を占めたるのみならず進級試驗さへ一回受けたり越へて二十二年五月三年課修業中華族女學校に轉じ先づ高等中學一級の希望生たるを許され同年七月本入學を許され高等中學三級生に進み去る七月二十二日　皇后陛下親臨の際同級卒業の證を授けられたり本年夏期休業歸省中偶々賜暇に罹り去る八月廿一日午前八時十五年九ヶ月を一期として溘焉も簀す嗚呼悲哉易簀の前伊澤郡臧氏より波多野傳三郎氏へ送りたる手紙あり聊かケイ子の素志を窺ふに足るを以て左に掲ぐ

拜啓昨十九日付尊翰昨夕到着拜讀御深切之段奉萬謝候偖ケイ事一昨十八日朝當院長之診斷にて愈々危篤に陷りたりとの塲合にして一兩日中も保たしむるの外手段無之旨申聞られ且つ山龍堂病院長を招くも諦らめの爲めなら夫迄なれども反りて無益ならんとの相談有之候得共如何せんケイの希望なれば昨十九日當地に右樫村先生を招待し午後三時三十分診斷をうけ候處當院長見込みの通りにて致方無之次第に御坐候右の次第に付僅かに一兩日の餘命を繫ぐまでの手當を請ひ内樂爲致候處今朝暁頃より非常の煩悶を發し今か〱と親族共打寄り介抱罷在り終に先生御投與被下候藥劑を服せしむる事に決し直ちに相用ひ候尤も其の十分間前醫師の注射も有之候處本日午前第十一時頃に相成り頻に其の煩悶去り多少笑を含み物を言ふ樣に相成り候故に小生儀ケイに向ひ親族等立會ふたる處にて尋ねたる所を左に申上候

　ケイは全快して學校に出づる頃は何月と思ふや
今度は氣永に療治をする積りだから未だ其の全治出京の時は分りません
　當時の學校を卒業したる後は何をするか
私に考がありますけれども後にて御咄しします
尚ほ強ひて聞きたる所今晩に咄しますと云ふたり然れども小生は晩の見込みなければ尚ほ親族共をも去らしめ聞きたる所左に
　當學校を卒業したる後は米國に渡航し（家に金もないのに錢金を掛くるは快よからぬから某洋人に從ひて）大學に入り專門を修め後歸朝して後は獨立して學校を設け教育上に從事し貴方兩親は充分立派（此時笑を含みし）に御世話するの希望であります然し是れは未來の事につき決して他に洩さぬ樣にして下さい

右に付金は兩親が稼ぎて出すから心配するなと申しました右にて一先咄を終り立去らせたる親族共を呼寄せるでさすり抔致居候處すや〱と寢入候是等は必ず御惠投の藥効と打悦び御厚禮申上候右は只今患者の睡眠を窺み相認め差上候間小生の胸裏御推察被成下度候今朝中には御報申上ぐる事に相成可申と存候得共不取敢右申上候紙も無之取急ぎ亂筆御用捨可被下候

同子の負望遠大なるを聞きて華族女學校學監下田歌子の歌あり

　散りぎはの言葉の花におく露はいくらの人の袖ぬらすらん

死に瀕して郡臧氏とケイ子との問答あり其人と爲りを知るに足れば左に掲ぐ

　疾く東京なる名醫を招待し診斷を受けざるは實に殘念なり子に對する慈父の情にあらず誠に汝に濟まず

偖々暫くしてケイ子莞爾として

　私がわるひの
　何故におまへがわるきか
　平常不養生な故にわるし
　何故に不養生なりと思ふか
　此丈けの病氣になる始まりに兎角稼ふて他人に知らせず故に

ケイ子は隱れて永逝を期したるにや永逝に先だつ殆んど十日郡臧氏に謂ひて曰く
　耶蘇教は誠に好き宗教なりなぜといふに死しても決して悲しむとなし天國に昇るとが出來るといふとだから

と

同子の夭死を惜みて

花さかむ秋を頼みし撫子のしをれにけりと聞くはまことか　下田歌子

おもひきや色香たのみし撫子の花さかぬまにかれはてんとは　鵜飼信子

朝夕に愛でし園生の姫小松千歳經ぬ間にふざかれにけむ　塙濱子

咲きてだに凋め惜きは花なるを蕾ながらにかれてけるかな　波多野傳三郎氏

○實に人はかくありたきものなり　まさた

或人仕合よくなりて、家を買得たりけるが、庭の松が枝に短册あり、

住なれし軒端の松よけふよりは、
のちのあるじのちよをともなへ。

といふ、一首の歌を書殘せしとかや、まことに、賣ける人の心ばへ有がたく、又あはれにおぼへり。されば買ふ人も此心を感じ、すゑながく睦びけるとなん。實に人はかくありたきものあるに、少しのことも心さもしく拙く見ゆるはおほし、すおほに心ゆたかなる人こそ、奥ゆかしくおもはるれ、おのれこの話を聞てかんぜしまゝ、外人にも傳へ聞さばやと思ひて記しぬと、あるふるきものゝほんに見へたり。

○犬殺し　かすみ

警視廳の許可を請け、東京府下にて此の營業を爲すもの淺草新谷町に六人あり、日々殺す所ろの犬は一人まへ七八頭づゝあり、一頭の價ひ大ひあるは二十錢、小さきは九錢位ひにて、都合よき日は一圓以上を得るよし。情けなき業務もあるもの哉、俑を作りてすら聖人は後なしと云へり。

靜女塾主平尾光女史を訪ふ（四）

生野ふみ

此談話の内に幽かに庭下駄の音して窓の邊に人の氣はひせしかば何心なく外の方を打見やりたるに女史は例の淡泊なる調子にて「あれは生徒が植木に水をやつてるのです私の方は別に躰操をさせ升ぬから其代りに生徒に植木を任せて置くのですこれが丁度朝夕能い加減の運動にもなり生徒の慰みにもなり升と申されたり是にて前刻示されたる生徒某女の書翰中に植木云々の文詞ありし由縁も知られて一層床しう感じぬ。女史は更に又語を繼ぎ「それに私の塾の教育法にはモ一ツ他と異ある處があり升とて當塾は試驗をさせぬといふ事を說かれたり。其理由は學期毎に試驗をして級を進むる事とする時は却て生徒をして平素怠惰ならしむる弊ある者にて又試驗前にのみ無理な勉强をするが爲に身躰の健全を傷り腦力の衰弱をも招くとあれば只日毎に生徒の勤惰品行の良否學業の進歩如何を點撿し置學期の終に通算して黜陟を定る樣に爲居と申れたり。成程妹も嘗て或學校に在たる頃平素は心ならずも怠惰して扨試驗前となれば急に勉强して何も角も一度に腦に詰込夫にても間に合時はエヘンの咳拂らひと共に一二の不審は胡麻

化し去り無難に試驗を通り越せしためしのなきにしもあらざれば今女史の說かるゝ所を聞き若し此無試驗の方法にして一般に行はるべき事あればどうぞ左樣に致したきものなりと思へり其は妹が試驗に於て萬一を僥倖したるが爲め今日實際に於て困るとの屢ばあれば也。左れど廣漠なる時間の通過するを年、月、日、時にて限るとの如く、時々に區域を假きて過ぎ來し方と行く末とを思はしめ、顧みれば既に千丈、前途尙ほ万丈の感あらしむるは、亦た益あり、必竟試驗そのものゝ惡しきにはあらねど、平常今の如き教育を行ひつゝ期日來りて乍ち嚴密なる試驗を行ふの方に至りては、教育學上善きととは思はれぬなり。其の次に今一つ女史が得意に語られしは常盤の卒業證書の事にぞある女史の示さるゝに依りて之れを一覽せしに其は一尺五寸ばかりのヌメに女史が自筆にて生徒の爲めに品行と學業とを保證せられたるものなり成程之れを印刷に付したる他の一片の紙切れに比べては之れを貰ひたる生徒の身にとりて如何計りか嬉しきこととなるべし、尙ほ女史は、

漢文並に詩に巧みあり

てふとを傳聞し居たるを以て其文學特に詩に對する意見のほどを聞かまほしゝと思ひたれ共餘りに談話の興に入りて餘程時刻の移りたると折ふし客人の入來られしとを以て猶且心殘りはせらるれど暇を告げて立歸りぬ。

思ふに女史は多年實地に女子教育に從事し居玉へると云ひ、又自分其主任者として今日まで種々に考案をめぐらされたる事なれば其教育法中には一種特得の妙所ありと覺へぬ。殊に又妹が女學雜誌社員として女史を訪問したる意見を推せられ一問を發する每に一々之れに滿足なる答へを與へられ然かも能く其機を察して妹が未だ口を開かざる事々までも篤々說き及ぼされ妹をして毫も遺憾なからしめ玉ひしは深く感謝し大に敬伏する所なり妹は女史に送られて戶を出る時にも女史の快豁なる風姿と意氣とに敬愛心を惹かれ何となく分れを惜しむに至りたり。依て妹は其時門に向ふて步みを運びながら斯く思ひぬ斯の如き女傑は方今多く得難し妹は爾後屢此塾に出入する事あるべしと。

涙滴々

姉に別るゝの弟、中途路端に走り出して、悲しき心を文にて言ひ送れるやう、

姉君樣、僕は今ま、曾我の墓の石に腰かけて此手紙を書き居り候、今少し前アノ松の下道にお別れ申せしとき、アー胸も張りさけ申候、後ろ髪引くに引かれねど無理に後ろを見ずに歩きて今ま曲り角に來りしとき、姉君何如に坐し玉ふらん何處の方にて……（コヽ迄て書きしとき涙一ぱいコボレました）フト振り向けば、アラ君にも歩み來ましてアノ角よりコチラを見て居らつしやるなり、今一度歸りて……言葉かけんとすれば早や俤の見へずなりぬ（玆まで書きし時ワツト聲立て泣きました、人生何如なれば斯く……僕は無中になりてかけ出せど○○○の最と遲く鳥居の傍より○○彼方を見れば湖水の彼岸邊に打寄せては碎くれど歸るさまの羨ましさ霧は一面に立昇りて離宮の方のみ見へ候○○○の處ろ涙にじみてよめず、編者道行く老母に行方を尋ねし時憐れと思ふてか最と親切に敎へ呉れ候、夫より山に上りて是ぞ最終の名殘りと振り向けば湖水の波霧に埋もれて離宮のみ見へたれば姉君は早や何處の邊に在り玉ふや無ぞや今頃はマダあの森の下道に僕を思ふて居て下され候や、僕今朝行くものはつらいが殘る人はいゝと申せし時姉君はそは同じとぞやと申されたり、僕の胸今ま如此なればさぞ〳〵姉君にも人知れぬ涙に打しづみ居玉へるならん、今宵の御膳はお一人ならん、今朝まで御一處に食べたりしに今夜は御一人にて、フト目醒め玉へる時、弟はと手を延し玉ふとも此の弟は居ませぬぞよ、湖水の邊誰れと共に散歩し玉ふや、石に腰かけて居て隨分冷へます時も段々立ちますから、是から又も涙こぼし〳〵道をたどりましやう、姉君さまアナタ此墓を通りて見玉ふとき露にぬれ乍ら僕此の墓の石に腰打かけてお祈りし、そして此手紙を書きそして無言の涙にむせびしとを思ひ出して下され。

消夏錄（其五）

雲峯生

○柳色青々たり鶴が岡

源右府の墓地を過ぎ、青草緑樹の間を經ると數丁、茂り合ふ古松の内に入る、是なん所謂鶴が岡なりとぞ、歩を留めて左顧右眄す、遠近人跡絶ゆ、荒壘廢城見るべきなし、老樹古木只貞操を守つて森々たるのみ、嗚呼人生五十にして盡きはて人には如何に墓なかるらん、快樂何かあらん、財寶何かあらん、名聲何かあらん、源家榮華のあと今果して何かある、されど人命永存する者なるが故に余は猥りに哀辭を縷陳せず、

蓋し聊か信ずる所あればなり、松間を過ぐれば池水あり、波上白日映じ、蓮花涼風に咲き匂ふ、池畔青草茂り、草間古柳生ふ、嫋々たる青糸昔をかくる縁なるらし、繰りかへつゝ忍び思ふ事繁し、「千とせふる鶴が岡邊の柳原、青みにけりな春を知るらん」と昔の人は詠じけん、今尚春や知るらん青柳の糸、之に異り變りはてたる鶴が岡、又蜂腰一首を得ぬ、

今もなほあれし垣ねになびくなり
鶴が岡邊の青柳の糸

未だ感偶する所の一斑をも盡くさず、今咄嗟の間に此記をなす、不熟の責は固より甘んじて受く。

○花際に翻へる孤蝶

松間に一祠、今尚燦然たり、若宮八幡とは是なりとぞ、祠前に一古堂あり、しるべする人云ふ昔靜御前舞ひし所なりと、想ひ見る繊弱たる少婦敵地に捕はれ涙を呑むで恥を忍びし事を、双蝶あだし嵐に吹き別けられ、天涯青雲の外に居を隔て、孤蝶友を慕ふて花際に徘徊する樣にも似たりけん、「賤やしず賤のおだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」と歌ひて轗坎零落の身のはてを喞ちつゝ舞ひけるもいと憐はれなり、「吉野山峯の白雲ふみ分けて入りにし人のあとぞこひしき」といふに至つては更らに悽切にして感深し、鬱積せる衷心を歌へるあるべし、宜べなり千年の下人をして其歌をくりかへさしめ昔を思はしむる事、靜が舞ひしさま如何なりけん懷思ひつゞくるまゝ

たえまなく涙の雨にそぼぬれて
まよふてふのあはれなるかな

吉野山の歌を見てあはれと思ふ心を斯くなん

思ふ人の入りにし日よりよしの山
峯のしらくもこひしかりけん

いとふるめかしき感慨のみ長〲しく記さんも面白かるまじ人各昔を思ひ見ば余は記するを要せざるべし。

○朝日まつまの露の命

八幡の祠に詣る道石階あり、左傍大樹亭々として中空に立つ、人之に指さして云ふ、是むかし實朝害に遇ひし所なりと、萬民を凌ぐの威權何ものぞ、天下を壓するの位官何ものぞ、はかなき命は朝日まつまの露に似たり、實朝一朝刄に倒れ、あと茫々たり、害に遇ふの朝家を立出づる頃實朝が詠なりとて人云り、即ち「いでいなばぬしなき宿となるゝとも軒端の梅よ春を忘るな」の一首なりとぞ終句「春な忘れぞ」でもあらまほ

し、云ひ傳へ聞き傳へて賤の男が告ぐる所素より誤まれるなきを保せず、されど歌の意義判然瞭すべし、

君が見し軒端の梅に心あらば
むかしの春やこひしかるらん

大樹の傍を過ぎ、八幡の祠内に入り、寶物あまた見ぬ、家康の兜、重盛の笙坏珍らし、政子の鏡くもりはて、往事茫々うつる所あらし、家康の陣貝、賴朝の陣羽織或は古るび或は破れ僅かに形を存するのみ、いと貴とく見えしは數口の刀なり、北條氏綱、義宗等の佩びしと云へるもの、賴朝が富士のまき狩に用ひしもの等皆金銀づくりにて昔榮えし時を想ひ見るに足る。

きよめぬ疑

其二十三　洒落齋主人

己が首は何處だ

世に人と生れしものは、天竺の大哲學者釋迦牟尼、支那の大政治家孔夫子、小亞細亞の大道德家イエス、キリストと雖も、毫毛の愆謬なからましかは、况してや其のよの人においてや、しからず彼の人々の思ひ言行のくさ／＼、それ／＼の時世に定められし、或は定めんとせし標準には、毛ほどの違ひあらざりしかも、月變り星移り中久につけて、時世の風習、敎誨の條件、あるは需用供給の道理など云へることより、理化學の發明、工學の進步、醫學の自然の奥義に近づき行くこと、などにつけて、世のありさまの變り行くなめり。されば後の世の進みし考もて、古の人の思言行を調ぶるからに、違へりと思ふほどのこと、かならずしもになしと云ひ難し。後の世の人も亦た、博く學び、深く究めて、ひたすらに古人の言をのみよしと思はず、自らもつとめて、公なる道理を、見出さんことをつとむ可し。さればとて、己が力のいと弱く、己の腦細胞のさほど緻密にもあらぬに、古人の言ひおき、行ひおきしことを、一もなく二もなく、うちこぼたんとはかる、如き曲者は、沙汰の限りなるべし。わなみは常もかく思て、醫學の學びする者の、博く萬有學を應用して、攻究につき眼もふらず、ひたすら古今の事實にあてゝ、たくみに理と實との兩道に、のぼり行くを見て、世の唯理をのみ攻究するの人々も、早くかくの如くせば、いかに多くの尊ふとき道理を、發見んかと思ふことすきなし。さるに世の佛敎者、あるは孔夫子の道傳ふてふ儒者、キリストの道敎ふるてふ耶蘇敎者を見るに、多くは己が師、あるは主と仰ぐ者に、毫毛の愆謬、求てあからしめんとして、三千年四千年の昔に、言ひ行ひし

ことに、少しの過失もなく、それのみならで、今の世にも、其の敎理のまゝにて、事すむやう說きなさんとて、實は釋迦、孔夫子、——キリストの心にも、なかりしと思ふほどのことを、尾に鰭をつけ、蛇に足を添へ（ボアと云へる三丈五尺もある大蛇には後足の痕跡ありと橫鎗を入る可らず）、終には柱に膠し、己がなひし繩もて括らるゝやうなりもてゆきしは、そもたがなせし所爲ぞ——後に出でゝその敎理を、鸚鵡の如くに學びたる、經學者の罪ぞかし。此にても師や主に對する罪は余りあるに、その、後の學者ども、ひたすら過失の繼續をなし、今はまことの敎理悟りし者いと少きやう覺ゆるは、嘆かわしきことならずや。

人の心は傾斜き易きものかな、一度春をよしと思ふの意、生じたらんには、たとへ七草の色競ぶ可くもあらぬ野邊に、虫の聲々のいとあはれにも心ぼそく聞ふるを、ひたすら物淋しとて忌み嫌ふ。夏の有樣よしと思へる意の生じてよりは、吉野の山埋みたらんばかりに、つもりし雪の朝、咲くも咲かぬもなく、花もてみたしたる樹々の梢を、美しとも思はず。酒好む人は、茶好む者を腑甲斐なき奴と見做し。茶好む人は、酒好む者を、大事を語れぬ者となす。理論に走るものは、實地に從ふ者を、迂遠なりと嘲ければ、實地を勉むる者は、理論家をさして空中蜃氣樓論者と罵る。軍人は文官をさして鈍なりと云へば、文官は武官を以て暴なりと云ふ、みなその如く云へど、各なくて協はぬことは忘れたり。されば人の眼に毛の入りしをとりてやりつゝ、己の眼に梁の橫はるを知らず、人の笠の紐の緒の弛みしを敎ふる者、己が草鞋の脫けしに氣つかず。あだかも小兒の蓮の花とらんとて、池水の深きに溺るゝが如し。

佛遺敎經に云く（原書は漢文なれども此には平たくかけり）心の畏る可き毒蛇惡獸怨賊よりも甚し、大火の越逸なるも未だ喩ふるに足らざる也。譬ば人有りて手に蜜器を執りて、動轉輕躁して但だ蜜のみを觀て、深き坑を見ざるが如し。譬ば狂へる象の鈎なく、猿猴の樹を得て踴躍跳躑、禁制す可きこと難きが如し。

今は昔一人の獵童なんありけり、鎌を肩にかたげて、草刈らんとて家を出でぬ。細き田畑の畔たどり行けるうちふと、路の側に蛇の居るを見出たれば、之をうたんとて、肩にかけたる鎌の柄に双手をかけて引けり。あなあやうしいつのほどにか、鎌の刄は頸にかゝれり。蛇は殺されしか知らず。されど獵童は其のまゝ草を刈りて家に歸りぬ、明る朝となりて、又早く臥床をぬけ出、井の側に到り水を汲みて、顏洗はんとなしけるときあはれ首は、いつの間に何處行きけんあらざりけり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

小公子

第二回（中）

若松しづ子

併し、ハヴィシヤム氏の驚いたとはまだ外にいくらも有り升た。是はイギリスに一生を送つて、米人と米國の風俗には少しも慣れて居らなかつた故でした。職務上ドリンコート家には四十年間も關係して居り升て、之に附屬してゐる莫大の富も、威光も好く知つてゐると故、自分は全体冷淡なたちで、職務上の外は容易に口を開ぬといふ人物なるにも係わらず、遠からず、一切を受繼で、ドリンコート侯爵の尊號を名乘る可き此童兒を流石に輕忽には見做しませんかつた。此人はまた長男、次男が老侯の意に叶わなかつたとも、カプテン、エロルが米國婦人と結婚したのを烈敷憤ほられたとも、其未亡人が忌み嫌はるゝと今尚ほ以前に異ならず、其人の話にあれば毎も知らず、識らず、言葉を荒らげ玉ふとも承知して居り升た。老侯はいつも此婦人こそ我子の侯爵家の子息たるを知り、手練を以て欺きたる卑劣なる人物なれと斷じて罵しり居られ升た。ハヴィシヤム氏も、それ或は然らん位に半信半疑で居り升たが、其生涯の中には、隨分勝手氣儘な人物にも、貪慾な人物にも出逢ふたとのある人でして、增して米國人をば餘り好く思ひませんかつたと故、かく思ふも無理あらぬとでした。御者の案内で、馬車がとある下賤らしき町へ這入り、安ッぽい、小さな家の前へ止まつた時に實際ギヨツトした位でした。苟しくもドリンコートの城主と呼ばる可きものが角に萬屋らしき小店のある下賤な家に生れて、生長したと云ふは、どふ思ふても餘りに不相應なとと感じました。生れし男兒と云ふは如何なる人品、又母たるものゝ人柄はいかゞわらんと氣遣ひつゝも、心は一向進まず、有難くもなき對面と少し躊躇の氣味でした。自身がこれ迄久敷間其公務を引受けて居つた大家の事ゆへ、自然贔負も出來て見れば、亡夫の古鄕と、名家の尊嚴などに考への及ばぬ卑劣貪慾なる婦人と拖引せねばならぬ仕合は迷惑千万に思はれたのでしたらう。此老成なる代言人は生來冷淡、英敏なる事務家でしたが、高名なる此舊家に對しては容易ならぬ尊敬心を懷いて居り升た。メリーの案内に連れて通ふつた座敷を見、批評的に眺め升たが、質素にしつらつてある中にも案外小ざつぱりとして住み好さそうでした。周圍には安ぽい虛飾品物や額は見えず、壁に掛

つた多くもあらぬ顔面は品好きもの耳で、婦人の手に爲つたろうと思ふ奇麗な飾付が外に少し丹り有りました。先づこれ位ならば大して惡くはないが、カプテン、エロル殿の嗜好が好かつた爲かも知れぬと心の中に思ひ升た。併しエロル夫人が坐敷へ這入つて來たのを見ると同時にどうやら其人品が矢張り其包圍と相應て居るといふとに氣が付きました。此人が若し沈着で、物に動ぜぬ老紳士でなかつたならば、夫人を見た時の驚きが必ず容貌に露はれたに相違有ません。其質素な黑い喪服が窈窕な姿をよくも裝ふた處は七歳になる童兒の母といわふよりは寧ろまだうら若き處女と思へる樣でした。其若〳〵しい貌は奇麗に萎らしく、其大きやかな茶勝の眼には何處となく、優愛で、おぼこ氣な樣子が有ました。此一躰に萎〳〵とした處は夫に離れて以來まだ全く、去り切らぬ樣子振りでした。セドリックは此樣子をよく見慣て居り升たが、一時其の憂はしさが消失せて、母の貌のさえ〳〵するのを見るのは、只だ自分が一處に遊ぶときとか、話しをしてゐる中に、何か思はず妙なとをいふ時とか、又は新聞を讀んで覺えたか、ホッブスの談話で聞た可笑なませた言葉をつかつた時とかのとてした。セドリックは六ケ敷、長い言葉をつかふのが好でして、おつかさんのお氣に入るらしいのは嬉しいけれど、自分は一生懸命で言ふのに、なぜ人々は可笑か知らんといつも思つてゐました。さすが代言人丈あつて、彼の人は人物を見るのは得意でしたから、セドリックの母を一眼見ると直ぐに老侯がエロル夫人をば下賤で、貪慾な人物と見傚した判斷の大誤で有つたとの合點が行升た。ハヴィシャムといふ人は一生獨身で送つた人で、戀といふとさへ知りませんかつたが、此可愛らしい聲の、萎らしい眼の若婦人がカプテン、エロルと結婚したのは、全く其優な心を盡して其人を愛戀した故で、損益上、侯爵家の子息なるとは考に這入つたともないといふとの推測が出來ずして、先、これなれば掛引の面倒もない、又若年のフォントルロイ殿もドリンコート家にとつてさまでの厄介物でもあるまいかと思はれて來ました。それから又カプテンは生來、美男子であつて、此婦人も美人なれば、其子は多分器量が惡いとはあるまいと考へ升た。

最初、先エロル夫人に來意を告げました時、夫人は忽ち貌色を變へました。

オヤ、さ樣ですか、さ樣ならば、私はあの子を手離さねばならぬのでせうか？ マアーあの樣によく懷て居り升に、只今まで此上もなく樂しみにいたして、出來る丈の注意をして育てましたに、ソシテ他に何の樂しみもない私にとつて

れ、他人には分らぬほど大事な子で御座り升のに……、といふ聲の震へた處は如何にも愛らしく、眼には涙を一杯に湛へてゐました。彼の代言人はしわぶきしてかふいひ升た。

チト申悪い事ですが、老侯は貴夫人に對してエー、其……ひどく打とけては居られぬので、イヤ御承知の通り、老人と申者は兎角偏頗な者でナ、老侯も其偏頗心の甚はだ强い方で、一度思ひ込だとは中々解にくいのです、殊に米國といひ、米國人といへば、一途に嫌な質で實は御子息の御結婚のとに付ては、イヤ大した立腹で御座つた、愚老も實以て面白からぬ御沙汰の使者として推參するは迷惑な次第です、併し早い話しが老侯は貴夫人とは斷じて顔を合すまい、たゞフォントルロイ殿は手元へ引取り、自ら其敎育の任を採り度との御所存で御座る。元來、老侯はドリンコート城には余程執心で、お住いは重も此城中で、炎症痛風の持病ある爲、都には余り御滯在はないのです。それ故、フォントルロイ殿も矢張り重もドリンコート城に御住いになるとで御座ろう。貴夫人にはコート、ロッヂと申して、此城郭に遠からぬ、家屋を呈し、又是に加へて適宜ある歳入も差上る御所存で御座る。フォントルロイ殿がこゝに出入し母君の機嫌を伺はるゝとは自由にいたし置るゝ筈、只差留置るゝは對面幷に城郭への御出入のみで御座る。只今申し上る通り故、先方の謂分もさほど無理とは存ぜられぬかと思ひ升ナ。殊に申迄もなく、かくなる上はフォントルロイ殿にとりては敎育其他萬事に如何程の御利益か測られませぬと故、篤と御勘考願升。

と述立て、さて婦人は兎角涙もろいもの、かふ聞て泣出されはせぬか、左様なともあらば苦々敷とと心密かに其様子を窺ふて居り升たが、其様子もなく、たゞ窓際へ立寄て、暫く顔を背向て居られたのは、心の動揺を靜める爲で有つたのでした。幾ほどもなく、

カプテン、エロルもドリンコートを大層に慕ふて居られ升た。お國のとと云へば何でもひどく慕はしく思召して、お家を離れて居らるゝが始終御苦勞の種で有つたのでして、お家のとも御家名のとも格別大切に思るゝ方でしたから、其子に故郷の立派な處も見せ、殊には又未來に賜はるといふ位爵に對して相應な敎育が受させ度と、若し御存命ならば、思召は必定で御座り升。

いひ乍ら、席へ戻り、ハヴィシャム氏をしとやかに打見遣り、

夫が矢張り其通りに致し度と思ふだろうと存升上は私くしは他の考も御座りません。仰の通り、子供の爲には結構なことで御座りませう。そして、アノ侯爵樣はまさか子供が此母を嫌ふ樣にはお仕付遊ばすこともあるまいかと存じられ升。萬一さ樣に仕付やうと思召たとて、子供の害にはなり升まいかと思ひ升。誠に父によく似て、温和、忠實な方ですから。假令、長の年月顔を合せませんでも私をおもふことには變りは御座りますまい、增して折節の對面をお許下さるとあらば格別申し分も御座りません。

と何氣ない言葉を聞て老人の心の中に、さては心得たる婦人、自分のことては露ほども思はぬと見えて、別段先方へ要求らしいことも申出ないのかと思ひ、

イヤ、貴夫人が只管、御子息の行末のためにと御配慮あるは此老人も實に感服に存じ升る。フォントルロイ殿も御成人となりたる上如何ほど悦ばるゝか、計れませぬ。以來フォントルロイ殿の御一身、御幸福の爲には老侯にも充分御盡力ある御所存なれば、其邊は御心易く思召して宜しかろうと存じ升。キット老侯には貴夫人に代つてどこまでも御保護、御撫育あるとは、おうけ合致して置ます。

と聞いて優しい母心に少し思ひ迫つて、震へ聲になり、

どふぞ侯爵さまにはセデーにお眼かけられて愛して下されば好うござい升が、あれは氣立が誠に人懐こい方で、これまで優しくされつけて居り升から。

といひ升た。ハヴィシャム氏は又少し拍子抜がした樣に咽喉を拂ひました。心の中にどふも彼の持病持な、癇癖ある老侯が大して人を愛する樣なことは間違つてもないかと思はれました。併し自分の後を繼ぐ可きものを懐けて置くは利益で有つて見れば、先深切には扱ふてあろう、又人物が自分の氣に叶へば、隨分、人に對して自慢する程だろうかと思ひ升た。

フォントルロイ殿はキットお氣樂には相違御座りません、必竟、貴夫人が近隣に御住居なさる樣、お取計ひあつたと云もフォントルロイ殿のお心の中を推測つての御配慮で御坐る。

怜悧くも答ました。ハヴィシャム氏も流石侯爵殿の申された通りを其まゝ傳へるに忍びず、態と言葉を和げて滑らかに聞へる樣に注意致しました。さてエロル夫人がメレに子息を尋ねて連れ歸る樣に申付けて、メレが其有家を申した時、老紳士は又も一度ドッキリ致し升た。

ヘイ〳〵、雜作もなく見つかり升とも、又いつもの通り、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

今時分はホップスさん處の帳場のワキへお腰をかけて、政事の話しをして入つしやるか、ソウデなけりやあ、シャボンや、蠟燭や、馬鈴薯のあるなかで御機嫌で遊んで入つしやるにちげい御座いませんよ、エどふもお悧巧で、おかうえいらしいんですからネ。

とメレがいひ升た。エロル夫人は其跡を繼いで、

ハイ、アノホップスと申す人はセデーが生れた時から御存じで、大層深切にして呉れるので、セデーもよく懷いて居り升。

寄書

○「靑年よ警告す」の社説を讀む

女學記者足下足下が常に誠心誠意生等靑年の爲め提撕警醒の勞を取らるゝは生等が謝する所なり殊に前號の紙上社説欄内に於て生等の爲に忠告せられたる一文の如きは生等靑年が將來の行路を明示せられたる羅針盤なりと云べし生等は足下が心を用ふるの切なる意を注ぐの厚きを深く謝せざる可らざるなり耳は聰と云はず眼は明と云はず假令聰明ならずと雖も兩耳を有し兩眼を有するの靑年にして現今我社會の現象を見聞しその社會現象の啻に不調子不釣合なるのみならず實に此の「チョロケ」果てたる阿房界を認むるに於ては誰か之を憤慨せざるものあらんや若し彼等をして意の如くなるしめは又なすの自由を得せしめば必すや決然雷の如く立ち大山の崩の如く走り鐵拳を振ひ此の社會を毒するの惡鬼を一擧の下に撲滅せんと欲するならん然ども言論ハ易く實行ハ難し若し夫れ一家の弊風一人の僻習もこれを改めんと欲するハ決して容易の業に非す況んや一國一社會の改良をや此故に社會改良を以て自ら任する者其初陣の時に於てハ其勇其勢恰も朝暾の曈々として天をも燒かんとするが如き有樣あれども其一たび足を擧るや咄聲起り二たび手を下せハ誹謗至り其猶數たび動くに至りてハ反對起り仇敵出つ而して己が希望の地にハ猶未た寸歩も轉する能ハさるに早く已に千蹉万跌の苦界に落ち勇氣故に沮み熱情爲に冷へ復立つべからさるに至れるもの比々皆是なり。

之れ彼等靑年中偉大の勇氣を有するものあるにも拘らず其事業の困難を察し前車の覆轍を恐れ未た出でざるに勇氣中ば沮喪し出でんとして猶躊躇逡巡の境界を去る能ハさるもの蓋し少しからさる所以ならんか。

思ふに世の所謂社會改良者が中途にして勇飢へ勢衰ろへ再ひ爲す可らざるに至れるものハ偶然の事に非す其初陣の時に於て宜しく社會改良者が有すべき覺悟と決心即ち安心立命の地を有せざるが爲なるのみ今足下の筆に由て此理を明にす世之に依て天晴れ雲散し皎々たる明月を中天に觀るの感を抱き決然其進向を定むるもの蓋し生一人にあらざるべし之れ生が足下に對し深く感謝する所なり吁記者足下よ願くハ意を安せよ世ハ澆季なりと雖も何ぞ正義の友なからん生が爲すなきの身を以てするも今より正に深く覺悟し決心し正義の爲め社會の爲め假令一點の汚芥を掃ひ一滴の淸水を注ぐを得ざるも猶世の改革矯風家の後へに從ふことを啻ハんとす況や天下有爲の靑年諸君に於てをや他日手を採り步を並べ大に矯風の兵を擧げ改革の戰を開くハ決して遠きに非るべし時下暑熱猶酷なり足下幸に社會の爲め攝養あれ。

八月廿六日　　　上毛の一靑年　一　卉　生

女學記者嚴本君足下

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○七月七日

馬場　寛　吉

さやかに見へねども庭の面の梨桐の風にもろく落るあり園生の夕にすたく虫の聲々＝園々満栾露折々搔綸風＝何つさなく人の心の秋めきて勇む小兒の戯もゆかし今日は大陰暦の七月七日なり昨夜の風吹きて空かき曇りしにも似ず出づる日影のいつもよりも長閑けくしつかなりければ戸々の旗もかれてよりは樂しくなりさりさて晴昔の爪餅閑子のかず／＼飲食のあら／＼しき事はなくて閑素に心づくしの供へもの一ツ二ツ何よりも縫針の乞巧三昧手跡のつたなからんは友にも後めたき勸みの数も多かるべし時世を知らざる譯もあるべけれどもそもこゝが田舍輕佻浮薄の一足飛せんよりはまだしも益多かるべし。

年毎に心つくしや桐一葉

○夏の夕の川風

むさしの

金をも　溶くべき　大陽も！　あすを　ちぎりて　空　あかく
　入りぬ　西の山端に。
されば　水をも　沸くべき　炎熱も！　やう／＼　さめ
　ゆきぬ　行く水に　うたれて。
あさに　緑　したゝる　楊柳の　陰より　吹き渡る　清けさ
　川風　時を　えがほに　そよ／＼さ。
其の　川風に　衣ふかれて　立ちすまふ　えもいはれぬ
　心地よさ！
　あゝ　清風！　愉快！　好樂！　感謝せよ！
其の　川風に　衣ふかれて　浮世の塵に　けがれにし
この　魂を　洗ひ　さらす、
　その清さ！
　あゝ　清風！　無念！　無邪！　感謝せよ！

みね子

交　詢

●北海道駒形氏　本社通信員の事に付ては本誌二百十六七號に精しくのせてあります、就て御覽下されたし。

●白石氏、賤女氏　御尋ねの書物の事は今直ぐ御答へ申す譯に參りません、私事只今旅行中ですから數日後歸京して其上書籍店に問ひ合せ御答へ申上るつもりです、惡からず御諒知を願ひます

●上毛甘楽わさ子氏　只今通信女學植物の部を受持ちたる寺尾氏が旅行中にて御尋ねの件精しく御答へ申上げる事ができません、暫く御待ち下されたし

●丹波清水氏　人身賣買に關する御問ひ、少々取調べて見ましたが何分多忙にてよく御答へ申す事ができません、此事は法律家に御聞ひ合せになる方宜しからんさ思ひます

●野田氏　仰の如く家政學を教ふる書物は多くあります、瓜生氏の著に係るものは宜しひさの事です

●柳川の一寒生に　新島先生の顔にある疵跡につきては仰の通り色々の說があります、私は常に先生の教訓を蒙りましたが未だ問ひませなんだ、而し實際問ひしさいふ人の話を聞くにあれは先生が米國に渡る時船中にて船長に打たれたるあさなりさいひます、尙未亡人にでも問ひ合せて確報を致しましよう

●芝、鈴木信子氏　食兎飼養法は養雞法に同じく大切のものですから成るべく婦人方は御存知になつて居方が宜しひでしよふ、御問ひ合に從ひ、申上様さ思ひますが長くなります故迚も交詢欄にてはできません、故に此道に精しい人に依賴して養雞法の如く（養雞法は先達て本誌に揭げたり）亦本誌に於て述べましよふ、其時まで御待ち下さい

●しづのめ氏　御尋ねの書物の事も今暫く御待ち下さい

●鳥羽港山本氏　右同樣に願ひます

●一青年　士剣の事は格別名醫の證明を經たるものでもありません古書にありしまゝ掲載しました、昔の實話なれば確かなる事さ思ひます尙他にひまもあらば醫師の證明を乞ふ事に致しましよふ

●麻布南城氏　日記の表を書きたる云々の文學者は何人なるや種々問ひ合せましたが分りません救助會の事は時節後れさなりましたから書きて答ません

●伊勢新井氏　ラマバイ女史云々の御問ひは意味が分りませんから一應御知らせ下さい

●板堅氏　養雞の柔さ申す者は一通り養雞法を分り易く教へたるものにて之を讀めば養雞には差支へはないさの事です、實地に運用する事はできましよふ

批評

廢娼同盟會演説集　正義の反響

井上次郎

此は米國の人ウイスター、モリス夫人が、廢娼運動の爲にとて寄附せられたる金二十五圓を基とし、過る五月日本全國廢娼同盟會年會ありし節、二日間引つゞきて催ふしたる大演説會の筆記を輯め、出版したるもの也。飯野吉三郎氏開會の辭。金森通倫氏、快樂の源を潔くすべし。宮川經輝氏、姦淫に對する社會の良心。イビー氏、廢娼論の利害。大江卓氏、賣淫の弊風再燃せんとするを防ぐべし。植木枝盛氏、賣淫に對する社會の思想。根本正氏、一女數男。三宅雄二郎氏、余が所謂る廢娼論。横井時雄氏、家庭。ロッビンス氏口演、小方仙之介氏、通譯、所感。の十章を揭ぐ。飯野氏の熱心。金森氏の巧鋭。宮川氏の雄辨。イビー氏の謹密。大江氏の叙事。植木氏の精細。根本氏の快開。三宅氏の卓見。横井氏の優高。ロッビンス氏の濶大。みな紙面に映じて面あたり見聞する心地す。皆是愛國愛民の志操より發し、其聲筆記せられて遂に本書となりつれば、題して「正義の反響」と云ふ、甚だ當れり

○初等教育學　同

高須治輔氏譯。元著者は魯國人ポブロフスキ井氏なり。魯國近來ことに初等教育に注意し盡力世の常ならず、今の日本の教育家、英米獨三國の仕組に慣れて大魯の事を知るもの最も稀なれば、本書の如きは斯道を益する淺少にあらじ。

○童蒙例訓　同

明石居士と云へる人の編輯にて、表裝に題し汝の少なき日に汝の造主をおぼえよ」と云ふ、編者の心大率ね推知すべし。三十五の子供談を載するが皆な實話にして感ふかく、童蒙を訓ゆるには適當したるものと云ふべし。文章に至らぬ所ろあり、撰擇亦宜しきを得ると云ふにあらねど、此類ひの著作至つて少なきを思ふときは、本書の益を爲すとも亦淺しとは云ふ可らず。

○普通國文自在　同

初學者が國文を作くる階梯となさんが爲に草せしものゝ由。新倉鋭二郎氏編纂し、橘道守、落合直文の二氏校閲す。四季及雜の五部に分ち、各部に摘句若干並びに作例數篇を置て、作文者獨草の便りとなす。摘句の數、少なく且つ貧しく、作例亦た秀逸の品をのみ擇びたりとも思はへず。編者の苦心左程とも感じがたき節多し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

御殿様、御前様

チトノサマ頓かに増加したる今日、板垣氏遇る日の談話は、經濟者頂門の一針と云ふべし。君が前年伯爵を納受したるに付きては多少の異論もありつるが、今に至つて尚ほ此の俠骨を存す、依然平民の大根本たりと云ふべし。日本未だ平民主義のトノサマ化し去らざるものあるを大賀す。

島田三郎君

吾人は今來の出來事に於て島田三郎君が潔白なる思想の大ひに世に知られたるを欣喜す。吾人は何人にも黨するを欲せず、但だ志想純潔にして愛國愛民の念胸に切なるの人に對しては、殆んど自己の品格を棄てゝ之を賛援愛慕せんとを欲す。嚢に新島君押川君に於ける、今の島田君に於けるの類、即はち是れ耳。頃日島田君再たび合同問題に關して其衷心を吐露し、去九日毎日新聞の紙上、實に左の語句を以て結論したり、

政友の委任重しと雖、真心の指導更に重きものあるを信ずるのみ、予は決して決々たるとあるなし、予は黨派の別に拘はらず、進歩の朋友を全國に求むべし、而して改進黨員は近親しきもの也、一身自説の行否を以て此進歩の諸友に對するの交誼を變ずるとあるなし、能く現局に當りて全黨黨員の望を繋ぐは、改進黨中其人甚はだ多し、予は今より改良進歩的の一勞働者となりて廣く進歩の新領を開拓せんとを欲す、人あり若し予の崇拜者を問はゞ、予は西天を指してコブデン、ブライト二氏の名を擧げんと欲するもの也

あゝ島田君、君はブライトたるに優るとなけん。

○軍人社會

軍人社會は、世が開化するほど、いよ〳〵壓制となるものなり。洋行歸朝の青年徴されて現役に就き、居ち出で日本兵營内の規律を評して云へらく、少なくとも是れ三四世紀以前の世界なりと。此頃ろ京都大隊區の瓜生某が書冊を出版したり

さて免職にあへる如きは、蓋し珍らしきとにはあらぬなるべし。

○敵國外寇

支那人の説つれに空大、もとより綜を欠くと多し、到底用ひがたきもの也。左れど局促として小政黨に區々し、もしくは一科一文に凝滯して大勢を知らざるの徒は、請ふ眼を放つて字林滬報の一説を見、其の大不敵の言辭中亦一條の眞理あるとを議認し、顧念翠慮、少しく此の大印洲の前途を察ひよ。彼れ云く、

昔土亞、其歐洲を開るの念を緩めて亞細亞の方に轉ぜり亞細亞の地に於て南洋諸島を除くの外膏腴の地は唯だ中國と日本と朝鮮のみ……中に就き戒備なく攻取り易きものは唯日本一邦のみ日本は强大の名ありと雖ども未だ弱小の實を離れず……日本の弱小寧んぞ以て露國を拒むに足らん況んや日本は平常露國に屈辱し以て戰闘を憚みと爲すが故に之を防禦するの志なし……中國と日本との間隙なきにあらず然れども其曲實に日本に在り我に彼國人をして此時に及び能く自ら反りて前非を激ひ而して教を中國に得て中國に親附するの法を謀らず是れ則はち亞細亞洲を糾合して一氣となし聲勢既に振く兵力自ら雄なるべし是れ中國の爲めに計るに非ず實に日本の爲に計る也。

○美術學校中に蒔繪の一科を加ふ

美術學校の教科は繪畫彫刻のみなりしが蒔繪は我國特有の妙技にして他國人の模倣し得ざるほどの美術なれば是非とも教科中に加へ、專修の生徒を養成すべしとの事にて過日小川松民氏に教授を命ぜしが從來蒔繪師の家にて子弟に教授する方法にては生徒の倦怠を來すべしとて新に教授の方法順序を定め夫々取調べに從事し此程大概其方法も定まり既に普通科を卒業せし生徒中專修出願の者五六名をして先授業を初むる由なり。（朝野新聞）

○天地神學論

獨學困陋の人やうやく頭角を露はし來り、やゝ重くるしき議論を爲す。其言を聞けば、やゝ凡神論、及び一種のユニテリアンに近し。寧ろ一望せば解するに到るを以て、此等近來の傾向は寧しろ賀すべきものと云ふべき哉。

○万國平和協會會議

満天下に干戈を動かすことなからしめんと欲する万國平和協會は、七月十三日ロンドンにて開かる。獨逸、佛蘭西、伊太利、アウストリア、亞米利加、其他各國の委員來會す。

初日午前は、其の宗教的議案にして、彼のジョン、スチュワート、ミルが、利害を以て動く百人あらんよりも、信仰を以て動く一人あらん方遙かに強よしと云ひける論理に據り、此會の主義を擴張するに宗教的なるを可とするの說あり、是れ固より可決し、更に左の二條を決す、

一　四海同胞の覺悟は國と國との間にも擴張すべし

二　基督教は道德及政治上の進歩に至大の勢力あるを以て自今宗教及道德の教師には一層此主義の贊成及擴張の勞を委托すべし。

后ち此主旨に對し、數多の論文を朗讀するもの續々起る。扨て當日の午后は、教育及禁制的の議案に對し、又翌日には、開戰宣告に對する國際上の制限に關する議案に對しては、各國に戰爭商業檢査官の如きものを置き、十分に開戰の理由を精査し、いよ〳〵正大の戰なりと認めたる后に於て開戰の宣告を爲すべしと云ふ一論もありき。

○家政大學校

英國ニウハム女大學の近邊に、ヒーツドン孃が私立せる家政專門學校あり、其功能若々顯揚するを以て、近頃ろ同地に開きたる婦人大會の砌り、此精神に贊同助勢して更に之を家政大學校と爲し、小學校の生徒より引つゞき之を教授するの順序となさんことを決議するに至りぬ。獨逸にも、米國にも、亦英國にも、家政學擴張の氣運いよ〳〵熟するものゝと見へたり。

○アウストリア婦人大建白

墺國婦人協會は此度會員三千六百四十四名の連署を以て婦人教育擴張の議案を代議院に提出せりと云ふ今まその趣意を聞くに婦人に男子同樣に哲學科醫學科專門學士の稱號に關し秩序的なる大學校の教育を與へ又高等女學校に於て博士の位地を得べき權利を與へ並に墺太利－匈牙利版圖内に於て婦人科又は小兒科の資格を以て實地醫業を營むの權利を與へられたしと云ふに在るよし。

●明治產婆看病學校　今度京橋區弓町二十三番地に明治產婆看病學校といふを設け年齡十八年以上の婦人にして特に品行の方正なるものに限り入學を許す由にて修業期限を十ヶ月とし之を二學期に分ッて卒業せしむといふ。

●本所壽座　は男女混交演劇の事を興行せんとするよし、警視廳は最早壽座内の取締規則を發布するを宜しとす。

●越前の羽二重　外國商賈の影響に依りて橫濱に於ける生糸の相場が太たく下落せしより越前福井邊の機屋はコヽゾと遂に羽二重の織立に取かゝり昨今は非常の繁昌にて同地方一ヶ月の織高凡そ八千匹許にて相場は平均一疋九圓位なるが輸出の目的なれば此上は只だ米國爲替の下落せんことを祈り居ると云ふ。

●東京慈惠醫院　去月中芝區愛宕町の東京慈惠醫院の施療患者は六百七十二人日數七千三百八十五日内入院患者九十二人日數千六百五十七日外來患者五百八十人日數五千七百二十八日、又同月中同院會員となり每月一圓醵金する人は渡邊タマ子有志者にて醵金せし額は百圓長谷川吉郎氏百圓渡邊福太郎氏寄附金は五圓伊藤千代子十五圓長谷川吉郎氏なりしと。

●京都美術學校　京都には府立の畫學校あり和洋畫を教授し來りしが今度帝國京都博物館を同地大佛舊崇明院跡へ建築するに付該校をも同所に移し京都美術學校と改稱し其學科をも改正して尋常中學校と同等のものとなし全國美術學校の模範となすの計畫ありて目下其取調中なりと云ふ。

●三田尻女子青年會　は昨年四月渡邊又一氏發起となり明覺寺西法寺光明寺教信寺の信徒中妙齡の婦人を集めて談會を起せしものにて每月一日に各寺に於て順番に開會し以て安心を堅固にし且つ風俗を端正せり聞く處によるに當時會員七拾餘名にて最も與て力あるは明覺寺住職香川默識師なりと師曾て山口青年會なる出世間と世間法と合せ行ふ主義なる一會を組織し或は演說に或は雜誌に盡力今現に其會長を勤めらるゝよし。

●高知婦人會　は會員二百餘名ありされど其割には格別なる働らきもなし高知市帶屋町に設置したる仝會倶樂部は都合により仝所を廢し目下他に貸家搜擇中の由

●河内婦人教會　眞宗本願寺派の所屬にして會員は上中等社會の細君、令嬢、及び僧侶等を以て組織せられ彼等佛教徒が婦人の道德を涵養せんとすると共に其技藝を講らんが爲めなる由。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●和歌山婦人會員より全會講師へ贈物　全會は毎年冬夏兩度に出席講師へ謝禮さして會員より贈物をなすには何つも反物等を以て之に充てしも本年の夏期には同會より和歌山高等小學校女子部生徒へ奨勵を兼ねフクサの仕立を依賴し且つ惣体互に思ひ〳〵の縫繡をなさしめしに幸ひに出來も悅しからればさて同會講師へ贈りたり講師諸君には何つもの價貴きものよりは幾層の喜びをあらはされ夫々挨拶ありたり。

●神戸私立英語學校及ひ女子手藝學校　は過般來維持困難なるよしに聞きしか此度英語學校は神戸市靑年會に引受けて神戸靑年夜學會さし手藝學校は神戸婦人會に引受けて神戸婦人學會さ改稱し兩會さも九月一日より開かるゝよし尤も婦人學會には米人ゲレープス女史神戸英和女學校卒業生竹花梅代女史が働かるゝよし當地に於て敎育の振はざるは土地の情勢さはいへ歎すべきとなり。

●松山に於て女子の敎育を受くる所　は松山女學校及小學制度に從て設けられたる高等尋常の小學校あるのみ而して松山高等小學校及び外側尋常小學校は其生徒の多きと合せて二千名に及ばんさす松山高等小學校は全く男女を組別けにして敎授せり、此女子の卒業生は折々女生同窓會なるものを開けり、松山女學校は殆ど全く基督敎信者に依て立てられし生徒四十名、其新來地を既に占定したるを見れば益し改進隆盛の望ある知るべし敎師は五六名、中に米人カナサン孃あり。

●山梨英和女學校　には今期より高等女學校卒業生前田靜子並に取締さして靜岡縣の人神子田德子を招聘す。

●ホルランドの廢娼　和蘭にてはホン、ホーゲンドルフ伯爵夫人主さして廢娼論に盡力す、之が爲め近頃ろ八の都會に於て廢娼斷行さなれり。

廢娼記事

●密娼の異名

公娼ある處ろに密娼あり、密娼の下に又さまざまの密娼あり、既に名稱ある密娼の下に又人知らぬ密娼あるべし、山梨甲府の山中笑氏は、各地密娼の多きとを演說し且つ其方言を調査して云く。信州松本に針箱あり。上田にお獅子あり。西京に山猫あり。中國に白ゆもじ。長崎に平八。肥後にのすかひ。佐賀におツたぼう。島原に黑縮緬。長門にかごまはし。播磨になべ。出雲に買はんせ。神戸にちやら。丹後にお化。近江に二百ざう。美濃にボンボラ。伊勢に九年母。越前に革足袋。羽後にこもかぶり。越屏。武生にカボチヤ。敦賀にカンペヤウ。南部に生蛸。羽後にこもかよ。伊豆にセンピリ。下總にかたごて。仙臺に草餅。秋田に栾の花。遠江に水汲。伊豆にセンピり。上野にダルマ。相州程ケ谷に白鮮生。相眞に泥石。橫濱にひつぱり。もぐり。チヨンキナ等あり。東京に地獄あり。さて北海道に到り見れば函館にこもかぶり。根室にこんにやく。森に早馬。厚岸にかき。釧路に米屋女。メツチに七道。江刺にやかん。飯田に大根。有川に地たばこ。シリウチにはな曲り。チトシペにじゆん栾。山クシ内におつさせい。トリサキに油ツ牙。常別にかじかあり。山梨縣にたちかへれば、甲斐にサボシ、ざるそばあり。私は諸國の方言を集たうちに呆れたるは此等の賤業女子の名稱でありますが、殊に驚たのは越後の國ので御座ります。新潟に、モグリ、ウキミ、カハウリ、コモカブリ、フナマンヂウ、の五ツあり。新發田に、カボチヤあり。長岡に、スツポ。高田にシロユモジ。直江津にヒシヤク。糸魚川にトンブリ。三條にヒツメリ。村上にダルマ。村松にヨガラス。栃尾にカメ子。瀬波にナガレ。小千谷にシラト。白根にシボリ。長岡石内にオバサ、寺泊にコブ。地藏堂にアキ。與板にカクシ。六日町にキミ。小出にヒメ。尼瀬にべゝ。五泉にドダイ、イシ、なんど異名の多きと驚ろくべし。而して斯く密娼に名前を附する迄に至りたるは、大抵其近邊に公娼あるに由る也。

●斷然廢業

豆州三島に演說に趣ける節、津田仙、鹽本善治の兩氏が勸說ありける妓館淸水樓の主人は、今年中に廢業すべしさ契約するに至りしが、此度遂に斷然廢業したり。

●岐阜及橫濱

兩地方の運動益々隆んなり、其報告は次號に掲載すべし。

週報

○官令　本週勅令第百九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、二百、二百一、二百二、三、四、五、六及び法律第七十九、八十號等を裁可公布せらる

○宮廷　本月五日大坂市大火に附き兩陛下より御救恤さして金千圓下賜りたり

○政治　二日山縣、西鄕、山田、松方、靑木、芳川の六大臣登閣せり●四日內閣臨時會議開かる同日改進黨員は伊勢勘に於て會議を開けり●五日內閣會議に各大臣參集せり同日自由黨の諸氏は瀧山町の事務所に會合せり

○雜報　五日大坂大火三千餘戶を燒失せり

夏季休業中の女學雜誌

青年男女の學生諸君、炎暑を山林幽邃の地に避けて閑書靜讀し、此際總じて雜誌新聞紙の愛顧を欠きたる憾み少なしとせず、今や鮮新爽快の活氣を以て復た此度復校せらるに會し、此の暑中二ヶ月間の雜誌を顧慮して、舊友と再たび握手せらるゝは當に其の温情の尤も愉快を感じ玉ふ所ろあるべし。女學雜誌は云く、妾は、又、生は、

社説に於て

「詩仙」と云へる、幽にして高く、清くして趣きある詩論三篇を本誌二百廿一號以下三號に分載したり。題を分つて、詩とは何如なるものぞ、歌の論、歌の弊、歌の美、万葉集、宗敎心なし、貴族的なり、優弱あり、長歌長からず、歌の佛性、歌の未來、の十一節となす。盖し詩人文學者一讀の價ひあるべし。

「細君内助の辨」三章は、二百二十四號以下三號に見ゆ、伉儷和樂、團欒ホーム團欒、内助優貞の諸徳を敘述して殆んど洩らすとなく、自ら時弊に向つて一大針を挿入したり。

第二百二十六號の「鳴立澤に於ける西行」は、句々凄艷、或は哲學論あり、或は禪定禪見あり、或は流轉盛衰を大悟し更に一頭卓歩するの大觀念あり、人云く、近來の好文字と、若し然るとあたはざるも亦た讀者の一顧を煩わすに足るべし。

第二百二十七號「青年に警告す」の一篇は、大ひに青年諸氏を奮激痛泣せしめたり、同號の「貞人ある寡婦」の一篇は、多數多恨の婦人に代つて其の深意微情を代言し盡し殆んど餘蘊なし。

論説に於て

在ハワイ受洗の始末(安藤太郎君)第二百二十一號以下三號分載

慈善事業に對する婦人の心得(スピンチル君)第二百二十二號

女子敎育の私見を述て巖本兄に寄す(寺尾熊三君)第二百二十四號

内助の功益(中島とし子)第二百二十六號

何故に女子は政談集會に參聽するとを許されざる乎 第二百二十八號

幼稚園の論(豊田芙雄子)第二百二十九號

議員、官吏、有志者に呈す

拜啓益々御清安奉賀候國家の爲め重職に就き日夜御黽勉作陰邦民の爲に鳴謝致居事に候陳者近年女子敎育頓かに進歩し二十三十にして初めて女學校に入る人も多く有之の勢ひ喜ばしきとと存候然るに既に一家の妻とあり特に多忙多用の貞人を内助せらるゝの令閨諸君は出でゝ學び給ふの暇ま固より少きの處ろ、世は息まず開化し婦人の地位漸じるしく進歩致候に付きては、今後婦人同性の往來は彌よ自由になり女性が外に出でゝ宴會交際に周旋せらるゝと亦彌よ頻繁と可相成就其際賢夫人にして萬一普通一般の學識に欠る如きと有之時は談話應接の砌り面白からぬと數多出來すべくと竊かに掛念するもの少からず候。

弊社此等の不便に痛歎し、毎月一回通信女學講義錄と云へるを出版し、學校に通はれぬ婦人は家に居て獨學する樣、當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、百人一首講義、作文、算術、動植、理化學、萬國及日本の歴史、並に地理、等を一年にて滯りなく卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則を設け講義錄の文章は分り易き上に一々假名を附け、且つ繪を入れ、尚不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし、學校にて直ちに敎授を受くるよりも一層便利多く致候、毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚餘の講義錄を月々送るとに候目下既に第八卷を出版致たれども、今月新たに入學し其第一卷より順次に稽古するも宜しきとに候。

右の主旨何卒御賞玩被下弊社の精神御吹聽の程偏へに奉委賴候、凡そ賢夫人家に居て内を修むるの暇まく、當今の女學悉皆講習の上に内助の德一きわにして所謂烈夫賢妻共に國事に盡力するの美觀國中に充滿するに至らば邦家の幸福至大にと存じ候敬白

右通信女學講義錄壹册三十二錢(全國無郵税)毎月十日出版、半年前金壹圓八拾錢。一年前金三圓五拾錢。女學雜誌と併せ講讀の人には壹割を減す。

東京市麹町區六番丁六番地

女學雜誌社

女學雜誌社出版書目

著者	書名	册數	價
鈴木弘恭大人述	つれ〳〵草講義	一册	價金十錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一册	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一册	同三十五錢
船越錦太郎君著	產婦小兒攝生法	一册	同十八錢
岡輪正路君纂	ひめ鑑	一册	同四十五錢
中島俊子著	善惡之岐	一册	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一册	同廿五錢
島山三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一册	同五錢
巖本善治述	妓樓全廢	一册	同五錢
島山三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一册	同五錢
農学士寺尾無三著	植物學	一册	同五錢
林學生星野信著	昆虫 植物 金石 採集法	一册	同十五錢
明治女學校教師八木兼辰著	和畫手本	四册	同四十五錢
女學雜誌社編輯	演說稿作材料	八册	同八十錢

下六番町六番地

女學雜誌社

女學生

●毎月一回 ●本誌は京濱間十又五の女學校
●廿日發兌 同盟聯合して發行するものなり

今や我國の文學意盛ありとす女子たるもの亦學問に通し文章をよくするの必要ある此に喋々するを待たずして明かなるべし女學生の出る誠に偶然ならず、御何處の女學校を問はず同盟に加はらんとするものは續々申込みあるべし●文學會は一校と生氣となるべきものなれども今日女學校内の文學會も盛なるはなかるべし女學生は各學校文學會の中心となり記錄とありて廣告とあり且奬勵者たらんと欲す
●社説には學藝上の論説を掲け文欄には女學生諸子の文章を載す同盟に加はらざる女學生より投寄の文を寄書となす其他公評、女生交詢、報告、講武等の諸欄を置き專ら女學生の益ならん事を許る

發行所 下六番町六番地 女學雜誌社

女學雜誌廣告の文

女學雜誌と云ふ雜誌は、總べて女の心得に成ることを書きたる者にて、娘の爲めには學問の仕方より身のたしなみ方、朋友への交はり方、親への仕へ方などを細かに敎へ、妻の爲めには家の修め方より、料理、ぬい針、下女の使ひ方を初めとし、良人へ對する心得、姑舅へ對する心得、兄弟へ對する心得に至る迄で節事に敎へ、世の爲めには、妊娠中の愼しみ方、產前產後の用心、子供の育て方、敎育の道理などを綿密に敎へ其上世の中の有樣は如何かにて之に對する女の心得は如何ん世上の女は如何やうに開化し、女の風俗流行は如何樣に變るかの事より、大なるは最も良人の一身に關はる世の大變を初め、小さきは物の直段の高下、品物の有り無し、雇人有無の景況に至る迄で、凡そ一國人として、一女子として心得置ぬば成らぬくさ〳〵の事を、洩さず落さず、極く分るやうに書列ねたるものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす每科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

廣告

看護婦生徒募集

本社看護婦生徒五名欠員ニ付募集候條志望ノ者ハ廿三年九月十五日マテニ本社病院ニ申込ムヘシ但シ年齡二十歲以上三十歲以下ニシテ獨身健康ノモノニ限ル尙規則及ヒ手續等ハ病院ニ就テ問合スヘシ

廿三年九月

麹町區飯田町四丁目三十一番地

日本赤十字社

横濱山手百七十八番

フェリス和英女學校

本校は**幼稚科小學科豫科本科高等科**の五科に分ち**智德躰育**の大本に基き内外敎師周到懇切に之を授く冀くは世の眞の**女子敎育**を望み着實進步を求むるの諸彥幸に之を信じて愛娘令妹を付託せられよ

廢娼大演說

辨士數名。傍聽無料

今日午后一時

上野上廣亭

廢娼壯年義會

福音週報

每金曜日發兌

弊社發行の福音週報日に增し隆盛に赴き社員一同欣び居り申候看客の厚意深く鳴謝致し候九月以后更に社務を擴張し紙面記載の事項を精選し愈以て從來の素志を實行し江湖諸彥の望を空うせざるやう勉强仕る可く候

九月以後の福音週報

從來の社說、雜錄、家庭、史傳、論說、靜思の時、等の外に左の數欄を增設致し候

讃美歌 是は新躰詩に工みして基督敎社會の詩人ある戸川安宅氏此作歌を掲ぐ

使徒信條講解 今や信仰の理由を說明すること極めて必要なる時期到來せり本社茲に見るところありて此の欄を設く但し植村正久氏の起稿み係る

基督のゑすがた 社員の譯する所にして基督の性行を畵き出し基督信徒をして其の則るべき摸範を知らしむ

一部	金二錢五厘	郵稅共	三錢
三ヶ月(十三部)	前金三十一錢五厘	同	三十八錢
半年(二十六部)	六十錢	同	七十三錢
一年(五十二部)	一圓十四錢	同	一圓四十錢

發行所

東京麹町區三番町十番地

福音週報社

遞信省認可

新入生徒募集

來ル九月ヨリ校則ヲ改正シ尋常小學部幷ニ幼稚園ヘ新入生徒ヲ募集ス○尋常小學部ハ普通課目外ニ英語ヲ親切丁寧ニ教授ス○幼稚園ニハ今回新ニ保姆ニ熟練ナル「エダ」孃ヲ招聘シ專ラ育ノ衝任セシム○本校ハ亦英語編物及音樂ヲ專ラ學バントスル女子ノ望ニ應シ親切ニ教授ス

私立櫻井女學校附屬

麹町區下二番町四十六番地

尋常小學校及幼稚園

生徒募集

規則書ヲ望ム人ハ二錢切手送レ

本月十五日ヨリ始業

東京市京橋區弓町廿三番地

明治産婆看病學校假教場

來る九月より婦人傳道者募集に付き志願の者は當會に於て問合すべし

但し少しく敎育を受けし者を要す

麻布永坂町一番地

聖ヒルダ傳道會

築地四拾貳番新榮女學校

今般麹町區上貳番町三拾三番地ヘ一層盛大ニ新築シ女子學院ト校名ヲ改メ從前ノ如ク九月十五日ヨリ授業ス入學志願者ハ同事務所ヘ申込アルヘシ

九月九日

麹町區上二番町三拾三番地

女子學院

●自宅獨習生募集 ●速記法

月謝廿錢二ヶ月卒業規則入用者ハ二錢郵劵ヲ投ズベシ

東京下谷區徒町三丁目三番地

速記學專修所

青年雜誌

會費毎月金五錢

會員ニ限リ頒布ス

毎月一回發兌

天崩レ地裂ク舊制度既ニ仆レ新改革將ニ起ラントス此秋ニ際シ滔々タル社會ヲ驅リテ遊惰文弱ノ境ニ沈淪セシメ卑屈營利ノ下ニ奴隷タラシメントセリ而シテ此恐ム可キ忌ム可キ風潮ヤ我黨青年ヲシテ亦其渦中ニ投セントス何ゾ酷烈ノ甚シキ吾人之ヲ慨嘆スル久シ玆ニ同志相謀リ青年雜誌ヲ發行シ我國有爲青年ノ機關ニ供シ互ニ智識ヲ交換シ互ニ元氣ヲ發達セントス願クハ同感ノ士ヨ之ガ徵志ヲ贊助セヨ

來ル九月廿五日第一號發兌○本會規則ヲ要スル人ハ二錢切手ヲ送レ○雜誌ノ見本ハ五厘切手十枚ヲ送レ

東京神田猿樂町三丁目一番地

發行所 青年漱石會

本校當學季授業の儀來る十六日より開始候間寄宿生は十五日に入校通學生は當日より參校可有之候

麻布鳥居坂

私立東洋英和女學校

東京市麹町區下六番町六番地
發行所 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY